

目的語と補語

—提示陳述と説明陳述—

傳 田 章^{*1)}

A Study of Object and Complement in Chinese

—On the Two Patterns of Expression—

Akira DENDA

外文要旨

本文把说话中的词语(词和词组的总称)称作述说,以有别于作为辞书条目的词语。述说中,有把思维中的存在物(客体)提示在句子中的提示性述说(比方说主语),也有在句子中解释上述提示的解释性述说(比方说谓语)。我认为,可以把动词后面的补充成分(广义的补语),根据其是提示性述说还是解释性述说,分为宾语和补语(狭义的补语)。(这里的“补语”不是通常汉语语法中所说的“程度补语”,“结果补语”等类的补语,而是相当于英语语法中所说的 *complement*。)宾语示以动作(包括状态,变化)所涉及的事物(不只是动作的对象,也包括场面、现象中的个体等),是动作的外部存在。而补语则形容动作的内容,是动作本身。宾语由于它是动作的外部存在,具有一定的独立性,能以主语或介词短语的形式移到动词之前,但补语因为与表动作的动词结成一体,不能分离前置,要分离的话剩下的动词就不能表示分离以前的意思了。再则,提示性述说不能直接名词短语,解释性述说则不能直接动词短语。补语被视作辞书条目的词语以名词短语出现时,也仍然是一种解释性述说。反之,动词短语处在主语或宾语的位置时则成为一种提示性述说。汉语由于缺乏词形变化,有人把处于主位或宾位的动词和形容词称作其名物化用法,以后围绕这个兼类问题,一直争论不休。我想,这个问题通过分析词语的表达方式,述说的两种类型或许能得以解决。

和文要旨

発話される語句(単語と句を総称する単位)を辞書項的に切りとられたそれと区別して陳述と呼ぶことにして,陳述には思考の中で対象化され,客体存在としてとらえられたものを提示する提示陳述(たとえば主語がそれである)と,その提示されたものに説明を加える説明陳述(たとえば述語がそれである)とがあると考え,動詞に後置されてその陳述を補う成分(広義の補語)は,それが提示陳述のものであるか説明陳述のものであるかによって,目的語と補語(狭義)に分かれる。(この「補語」は通行の中国語文法でいう“程度補語”,“結果補語”などのそれではなく,英文法でいう *complement* にあたるものをいう。)目的語は動作対象など動詞のいう動作(変化,状態も含めて)の外にあって動作とかかわるものを挙げるのに対して,補語は動作そのもののありようを形容しているものである。提示陳述としての目的語は動作の他者としての独立性を持っており,容易に主語や前置詞句と

*1) 放送大学教授(人間の探究)

して動詞の前に移すことができるが、補語は動作自体をいって動詞と一体化しているので、仮にそれを切り離して前置すれば、残された動詞だけではもとの動作を表現することができない。また提示陳述は名詞句、説明陳述は動詞句などと短絡していうことはできない。補語は辞書项目的な語句としては名詞句である場合でも説明陳述なのであるし、逆に動詞句がそのまま主語、目的語の位置におかれるのは提示陳述となっているからである。単語の形態変化に乏しい中国語にあって、この形が変わることなく主語や目的語の位置に現れる動詞形容詞単語を名詞と見なし、動詞形容詞が名詞を兼ねるとしてよいかは永らく議論されてきたところだが、語句の発話のされ方、陳述に二つの型をみいだすことで問題は解決されるであろう。

1. 語句という単位

単語と (*word*) と句 (*phrase*) を併せて語句¹⁾ と総称することにする (ただし句は単語や句が構造を組んで結びついているものをいう)。これは単語のように文 (*sentence*) を一次元の線で切り分ける単位ではない。文の中で (文より小さい単位として) ある単語や句はそれぞれに一つの語句であるが、それが前後の語句と構造を組んで結びついてできるより大きな語句に埋め込まれるという重層の考えられるものである。たとえば、

我 不 看 电视。[私はテレビを見ない。]

という文において、二つの単語“看”[見る]と“电视”[テレビ]はそれぞれ語句であるが、それが動詞目的語構造で結びついてできる句“看—电视”[テレビを見る]もまた語句であり、さらにそれが修飾構造で単語“不”[…しない]と結びついてできる句“不—看电视”[テレビを見ない]もまた語句である。単語“看”と“电视”は語句“看电视”に埋め込まれ、単語“不”と句“看电视”はまた語句“不看电视”に埋め込まれる (埋め込まれた個々の語句の品詞別や構造などはそれを埋め込んで覆っている語句の層で考えることはできない)。

2. 語句を陳述として見ると、そこには提示陳述と説明陳述との別がある

語句はそれを一層上で覆うより大きな語句を直接に組成する構造の成分として、どういう機能をもって述べられるかで二つに類別することができる。語句を具体的な文の中から切り離して辞書项目的に取り上げてしまう危険をさけるため、本稿では実際の発話での語句を指して別に陳述と呼ぶことにするが、その陳述に二つの種類、提示陳述と説明陳述とがあると考えられる。この二つの陳述の違いは、動詞に後置されて動詞の述べるところを補う補語 (広義) が目的語と補語 (狭義)²⁾ に分けられるところに対照的に現れるので、以下はまずこの目的語と補語の別から入って解説したい。³⁾

まず提示陳述であるが、これは思考のなかで対象化され、客体存在としてとらえられたものを文中に (精確には構造の中に) 提示するものである。動詞の採る目的語は動詞—目的語構造での提示陳述のものである。

これに対して説明陳述とは言語思考をそのまま (いったん客体存在——他者として対象化するという手続きをふまず) 直接的に述べて提示されたものに説明を加えるものである。動詞の伴う補語は動詞—補語構造での説明陳述のものであり、その点で目的語と区別される。

一つの文の中でこの提示陳述と説明陳述がもっとも大きな単位となって現れるのは、その文が何について述べるのかという主題を提示する主語語句と、それについて説明を加える述語語句である。⁴⁾ 主語－述語構造を組んで一つの文を作り出す主語と述語に見られるそれぞれの機能をいう用語、「提示」と「説明」でこの二つの種類の陳述を名付けることにする。

動詞の伴う補語は説明陳述の語句として、同じ説明陳述の動詞と同質のものとして溶けあっているように見える。これに対して動詞の採る目的語は動詞とは異質の提示陳述の語句として、相対的に独立性を保持している。この点で二つの構造、動詞－補語構造と動詞－目的語構造とは成分の性質の違いだけでなく、その構造の組まれ方そのものも異なるもののように思われる。

最初に定義的なことばかりを記してしまったが、以下それぞれを具体的に解説する。

3. 提示陳述としての目的語

動詞のとる目的語⁵⁾は思考のなかで対象化され、客体存在としてとらえられたものを、動詞－目的語構造の中にその一方の組成成分として持ち出す提示陳述のものである。目的語にはおよそ次の範囲のものが考えられる。⁶⁾

まず手でふれることのできるような具体物は、思考の中でもっとも容易に対象化されるものである。(以下は下線で構造を示し、二重線はその中心語を示す。)

吃苹果 [リンゴを食べる]

看了她一眼 [彼女をちらっとみた]

具体物だけではなく目に見えないようなものも思考の中では客体的存在としての「もの」に対象化される。

看病 [(病気を診察する →) 診察をする]

下定决心 [決意を固める]

移動や所在をいう動詞に後置される場所語句は、「もの」とは別の「ところ」をいうものではあるが、思考の中の客体的存在であることには違いはない。

去上海 [シャンハイに行く]

放在地上 [地面に置く]

还没到五点 [まだ五時にならない]

「もの」と「ところ」では「格」の違いがある。もし「格」をいうのならば次のような現象描写の文(“存現句”)のそれも主要な一類として挙げられなければならない。

下大雨了 [大雨(か降る →)になった]

来了一个客人 [お客が一人来ている]

しかし「格」を分ける前に、まず動詞の後に提示陳述を置くという構文形が後述の補語を伴う形との違いで話者によって把握されていると考えるのである。

思考の中では、静止固物としての「もの」だけではなく、動き(時間)も含んだ「こと」も対象化できる。次のような動詞句や文の形をとる語句は「こと」をいう提示陳述である。

教唱歌 [歌を歌うのを教える]

需要增加 [増加する(ことが必要である →)必要がある]

看看那个小伙子是谁, 志芳! [老舍:「女店员」] [あの男の子がだれだか(ということ)を見てごらんよ, チーフン!]⁷⁾

以上動詞の目的語となるものの例をいくつかあげたが、これは思考のなかでの対象化とはどういうことか、そのおおよその輪郭を具体例で示したものである。

4. 補語は説明陳述のものである

同じく動詞に後置される成分(広義の補語)であっても、次のようなものは思考のなかで対象化された事物をいっているとは考えにくい。

我是铁路工人。[私は鉄道労働者です。]

断定をいう動詞“是”[…だ, …である]と後に続く“铁路工人”[鉄道労働者]との意味の関係が、上述のたとえば動作とその対象物をいう場合と対照して、単に対象物ではないという以上に著しく別種類のものであることはだれしもが直感するところであろう。一般にはこの類の動詞は「自動詞」であって、後に置かれた名詞句は動詞のいうところを補う補語であるとされる。この補語とはどういうものかをあらためて考えてみよう。「自動詞」の他の例をあげる。

他叫李军。[彼は(名前を)リー・チュンといます。]

動詞“叫”[(名前を)…という, …と名乗る]もこの種の動詞としてよく挙げられるものだが、これはたとえば日本語で「(婿入りして)堀部(姓)を名乗る」などという場合のように、すでに対象化されている名前をとりあげて、それに「名乗る」という動作を加えるというような思考ではないであろう。“李军”は他者として存在するものを提示しているのではなく、名前そのものを直写して“叫”という動作のありようをその実体内容の面から形容しているのである。それはたとえば、

他原来叫李军。[彼はもとは(名前を)リー・チュンといった。]

他也叫李军。[彼も(名前を)リー・チュンといます。]

などと副詞“原来”[もとは], “也”[やはり, …も]がそれぞれ動作を他との関係の面などから形容するのと、動作のありようを補い述べるという点で同類の機能を発揮しているものと考えることができる。この観点からすれば補語は動作行為の内容面を形容する後置修飾語といってもよいものである。

動詞に後置される成分のうち、この類のものは一般に主語として述語の前に前置するのがむずかしいことが指摘できる。これは補語の陳述(説明陳述)と目的語の陳述(提示陳述)の違いをよく示す文法事象といえる。目的語が指すものは主語や前置詞(“介詞”)の付加された句に換えて容易に動詞の前に持ち出すことができるということは、目的語が持つ独立的な性質をよく現している。すでに対象化されているものであるので言語の思考の中でこのように振る舞うことができるのだと考えられる。

一方、補語は独立的なものではない。これを主語の位置に移して“* 李军我叫。”としても尋常の発話にはならないのは、動詞と補語が同質のもの同士の有機的結合、融合で一つの述語句を作っていて切り離すことができないからである。動詞-補語の融合で表現され

る動作を(仮に補語を前に移して残された)動詞一語だけでは表現できないのである。動作対象など目的語のいうものは動作とは別に他者としてあるものであり、対話の場ですでに了解されている場合それは多くは目的語の位置から他に移される。

補語が説明陳述であることをさらに補語自体のもつ性質から考えてみよう。

你叫什么? = 李军。[あなた(名前を)なんというの? = リー・チュン(です).]

日常の対話でよく見かけられる名詞一語だけの応答だが、この“李军”も問いに答えて自分がリー・チュンという名前であるという説明をしている説明陳述のものである。これは“问李军”[リー・チュンに尋ねる]，“找李军”[リー・チュンを探す，リー・チュンを訪ねる]のような目的語の場合の“李军”が客体事物としてリー・チュンという人物を提示しているのとは違って、「リー・チュン」という名前そのものをいって、問いで提起された主題について説明を加えているのであって、両者は陳述の性質が全く異なるものである。そしてこの一語文“李军。”の説明陳述としての機能は，“叫李军”，“是李军”[リー・チュンです]などと動詞の補語としておかれた場合にも同じように發揮されていて、そのため動詞と同質のものとの融合となるのだと考えられる。目的語には以上のような機能はない。仮に、

你找谁? = 李军。[誰を探しているの? = リー・チュン(だよ).]

などというような対話があったとしたら、それは問いの構文形をそのまま受け取ったが“(找)李军。”と変則的な省略をしたか、あるいは問いとは全く別の構文形を選んで(断定の述語で)答えたかのいずれかとなるであろう。

5. 思考動詞と認識動詞——文補語と文目的語

補語と目的語の違いは、思考動詞と認識動詞を対照するときに明白な形の違いとなって現れる。

思考動詞というのは“想”[…と思う]，“说”[…という]などに代表される専ら思考の内容をいうためにある動詞で、思考内容を直写する文補語(文の構文形の補語)を伴う。⁸⁾

他想父亲一定会表扬他的。[彼は親父がきっと(彼を)ほめてくれるだろうと思った。]

她说她回去过两次。[彼女は二度帰ったことがあると知っている。]

一方、認識動詞とは“知道”[(事実を)知っている]，“记得”[覚えている]などに代表される専ら事態の認識をいうためにある動詞で、認識される対象として事態を直写する文目的語をとるものである。

我知道他不愿意去。[(私には)彼が行きたくないことはわかっている。]

记得他回来过一次。[彼が一度帰ってきた(ことがある)のを覚えている。]

この両者は、動詞の後置成分として特殊疑問文(疑問詞疑問文)の構文が置かれたとき、それが思考動詞の文補語の場合は全体の文が疑問文となるのに対して、認識動詞の文目的語の場合は全体の文が疑問文にならないという違いが出てくることが知られている。

你想他打算做什么? [(あなたは)彼が何をするつもりだと思いますか?]

他说谁要去? [彼は誰が行くといっていましたか?]

母亲知道孩子要做什么。[母はこどもが何をするのかわかっていた。]

你告诉他谁去。[彼に誰(と誰)が行くか(を)知らせなさい。]

認識動詞の文目的語は「こと」を提示するだけで、そこからは平叙や疑問、命令など一つの文が聞き手に何を期待して発せられるか——これを「訴えかけ」と呼ぶことにする——は出てこない。一つの文には一つの訴えかけがあるわけだが、もし認識動詞の文目的語が文としての訴えかけを発してしまったならば、この子文語句だけで一つの文表現が完結してしまうことになり、もとの認識動詞による親の文の述語がハンギングになってしまう。子文にはあくまで親の文の述語の一部品としての提示陳述の地位にとどまっていなければならない。

疑問詞疑問文での疑問詞は特殊疑問文として意味上の疑問点を指示しはするが、疑問の訴えかけを発するものではない。文を完結させる機能としての訴えかけはやはり説明陳述の述語語句が発している。このことは“谁今天没有来?”[誰が今日は来なかった?]というような主語語句に疑問詞がある場合でも同じことである。

一方、思考動詞では文補語は動詞と融合的に結びついているので、文補語内に疑問詞があればそれはそのまま親の文の述語のなかに疑問詞があることになり、一つの疑問文述語ができる。

思考動詞と認定動詞の述語句の構造の違いを表にしておこう。(以下 { } は目的語を示す。)

你 想 这是什么原因 呢?

[これはどういうわけだと

(→ トイウヨウニ) 思うか?]

我 知道 {这是什么原因}。

[これはどういうわけかを

(→ トイウコトヲ) 知っている。]

6. 名詞句と動詞句の別ではない

提示陳述と説明陳述といっても、要するに名詞句(名詞相当語句)と動詞句(動詞相当語句)のことではないかといわれるかもしれない。たしかに文は主語には名詞句が置かれ、述語には動詞句(形容詞句も含めて)がくるのが一般的な形であり、目的語もまた名詞句であるものが他を圧倒するから、基本的には提示陳述は名詞句、説明陳述は動詞句のものという対応になるかもしれない。しかし、すでに見たように断定の“是”をはじめとして「自動詞」の補語は多くの場合名詞句であるにも拘わらずそれ自体は説明陳述のものと解釈される。繰り返すが、本稿が問題としているのはあくまでも具体的な発話としての陳述であって、文からきりはなされた個々の語句の形ではない。それでは具体的な文のなかでそれぞれがもつ構造成分としての機能が見失われてしまう。ここでさらに範囲を広げて、いくつか上述の基本的な対応にクロスする、辞書项目的には名詞句であるものが説明陳述となり、動詞句であるものが提示陳述となる場合を拾っていくことにしよう。

名詞句		提示陳述
動詞句		説明陳述

まず名詞句がそれだけで述語を作る名詞句述語文がある。もちろん説明陳述のものである。

今天三月八号。[今日は三月八日です。]

她十七岁。[彼女は十七歳だ。]

张刚北京人。[チャン・カンはペキン(生まれ)の人です。]

いずれも断定の述語が作られている。現代語ではやはりこの構文が用いられる表現の範囲は制限されており、通例は日付や年齢、出身地などをいうときである。この類の述語に数を用いるものが多いのは、とりわけて抽象的な概念である数というものが対象化されるのは日常生活の思考の中では比較的稀なことであり、もっぱら説明陳述として述べられるところに、動詞なしでも述語となる一方の原因があるかもしれない。

先に自己の名前を述べる動詞“叫”が補語として名前そのものをいう名詞句を伴う例を挙げたが、他人をなんと呼ぶかをいう命名動詞の場合にもその目的(格)補語⁹⁾に同じく呼称を直写する名詞句が置かれる。

我们都叫他王师傅。[我々はみんな彼をワンさんと呼んでいる。]

“王师傅”はやはり“叫”[(…を…と)呼ぶ]という動作の(構文から精確にいえば“叫他”)のありようをその実体内容の面で補い述べているもので、やはり説明陳述である。対象化された他者として呼称の“王师傅”という「もの」を持ち出していると考えことはできない。

他骂我胆小鬼。[彼は私のことを臆病者と叱るんだ。]

動詞“骂”では“他骂我胆子小。”[…度胸がないと叱るんだ。]と目的補語が動詞句ないしは文の形になることもある。¹⁰⁾

クロスするもう一方の線は動詞句(形容詞句も含めて)が提示陳述になるものだが、これは動作や変化が「こと」として対象化された場合である。中国語では動詞句が語形変化のないままに「名詞句」となって主語や(動詞の)目的語となるので、動詞形容詞単語は名詞にもなるのかという“兼類”の問題として議論されてきたものである。(以下は下線の語句が主語と“宾语”の位置に置かれた動詞形容詞句とされるものである。)¹¹⁾

打是疼, 骂是爱 [たたくのは可愛く思っているから, 叱るのは愛しているから]

打人不对 [人をなぐるのはよくない]

他的不来使人扫兴 [彼が来ないのはみんなを白けさせた]

他同意一块儿去 [彼は一緒に行くのを承知した]

学开大卡车 [大型トラックの運転を習う]

漂亮不等于聪明 [(容姿が)きれいということは賢いということにはならない]

见过不等于吃过 [見たことがあるということは食べたことがあるということではない]¹²⁾

次の例などは“宾语”として挙げられていても補語(狭義)と解釈されるものである。

开始售票 [切符を売り始める]¹³⁾

認識動詞が文目的語(提示陳述)をとるものにはすでにふれたが、主語がいわれなければ動詞句となるので、これもクロスの例に挙げてもよい。

别忘了把照相机带上。[カメラを(持つ →)持って行くのを忘れないでね。]

動詞、それも特に二音節動詞が主語や目的語として名詞のように用いられるのは抽象的な議論の文の表現に多く、翻訳作品の影響を受けたものであるとされる。“欧化语法”で増えてきたものというのである。しかし現代中国語のなかに確固とした文法形式の一つとして定着していることにはまちがいはない。

7. “指称性”と“陈述性”

分析が主語にも及んだところで、朱德熙の動詞句・形容詞句からなる主語と“宾语”にそれぞれ二つの性質のものがあるとする論を検討しなければならない。

朱德熙(1982)は動詞句・形容詞句(“谓词性成分”)が主語や“宾语”になった場合、それぞれ“指称性”のものど“陈述性”のものどがあるとして、それが“什么”でしか置き換えられないものは“指称性”のものであり、“怎么样”でしか置き換えられないものは“陈述性”のものであると説明している。¹⁴⁾

切り離された語句で見ると限りでは、“指称性”、“陈述性”は本稿のいう「提示」性、「説明」性に平行するようにも見える。少なくとも“指称性”のものが主語、目的語になる部分では問題はない。しかし“陈述性主語”と“陈述性宾语”は吟味が必要である。

まず“陈述性主語”だが、これは基本的には主語と認められないものである。朱德熙が挙げるのは次の四例である。(以下は下線(筆者)の語句がそれぞれの主語とされるもの。対比して()に“指称性宾语”の四例も挙げておく。)

干干净净的舒服 [すっきり清潔で快適だ] ……“陈述性主語”

(干干净净最重要 [清潔さが一番大事だ] ……“指称性主語”)

“干干净净的”が状態描写の形容詞で、“怎么样”としか置き換えられないというのなら、これは主語－述語ではなく、二つの述語の接続の問題になる。¹⁵⁾

大一点儿好看 [少し大きければ見栄えがよい] ……“陈述性主語”

天天练才学得会 [毎日練習してはじめてマスターできる] ……“陈述性主語”

(教书不容易 [勉強を教える(/教師をする)ということは容易なことではない]

……“指称性主語”)

(游泳是最好的运动 [水泳は最もよい運動だ] ……“指称性主語”)

主語ならば対象化されたものが提示されていなければならない。しかしここでは抽象的な少し大きいということそのもの、毎日練習するということそのものをとりあげているのではない。何か少し大きければ、毎日練習すればという条件をあげる述語として後につながっていく接続の問題である。¹⁶⁾

先别告诉他比较好 [とりあえず彼に話さないほうがよい] ……“陈述性主語”

(他母亲病了是真的 [彼の母親が病気になったのは本当だ]¹⁷⁾ ……“指称性主語”)

“先别告诉他”が“怎么样”でしか指せないというのだが、「とりあえず彼に話さないようにすれば」というような条件句に解釈するのであろうか。むしろ“怎么样”[どのような]が「どのようなこと」と対象化されるという思考の型で「とりあえず彼に話さないのが…」という訳が出てくるのだと解釈したい。

次に“陈述性宾语”の四例だがこれは本稿の観点からすれば、すべて動詞の補語(説明陳述)のものとなる。(“指称性宾语”の四例も挙げておく。)

觉得很舒服 [とても心地よく感じる] ……“陈述性宾语”

开始写小说 [小説を書きはじめる]¹⁸⁾ ……“陈述性宾语”

打算自杀 [自殺するつもりだ] ……“陈述性宾语”

この三例はいずれも「…トイウヨウニ」と動詞に対する説明性陳述の補語としてよい。

(看下棋 [碁を打つのを見る])

(考虑参加不参加 [参加するかどうかを考える])

(研究自杀 [自殺を研究する] ……以上三例“指称性宾语”)

喜欢干干净净的 [さっぱりと清潔なのが好きた] ……“陈述性宾语”

(喜欢干净 [清潔さを好む] ……“指称性宾语”)

この重ね型形容詞の例は主語の場合と同じく解釈が難しい。“怎么样”としか置き換えられないというのならば、動詞“喜欢”は認定動詞“愿意”，“爱”などと同類の「…したがる」であろう。

朱德熙のいう“指称性”と“陈述性”は、前者は従来から“兼类”の議論で取り上げられてきたものの性質を一步進んで明確にしたものであるが、加えて後者はこれまでははっきりとは指摘されてこなかったものを挙げていて重要な指摘である。ただし、それでもなお主語や“宾语”語句を切りとってその形(“什么”か“怎么样”か)の違いを記述するのにとどまるようであり、なぜ二つの違いが出てくるのか、本稿の考えるような文の中の(構造の)成分機能から出てくる違い、陳述としての違いは考えられていない。“指称性”のものも“陈述性”のものもともに“宾语”なのである。

8. その他の構文の解釋

動詞の後置成分に戻って、以上に述べたもの以外で残された主要な構文について見ておこう。

まず動詞-補語(単補語)で重要なものに、“能愿动词”の場合がある。

[認定動詞]-[動詞句補語(動作)]

能看日文报 [日本語の新聞が読める]

要 不要买肉? [肉を買わなくてはいけないかな?]

我怎么敢开玩笑! [私がどうして冗談などを申しましょう!]

これを助動詞とする見方があるが、機能の面からいえばこれを後にくる動詞句に対する補助的なものと見なければならぬ理由は見あたらない。単独で応答の述語を作れない場合があることが指摘されているが、¹⁹⁾それはこの類の動詞の機能がそうさせるのではなく、その表現する意味(動作についての可能、必要、当為、必然など抽象的な性質の認定)に具体的なイメージを持たせるために、実体的な動作をいう補語語句を伴う必要があるのだと考えられる。また“会”，“要”など多義に用いられるものの場合はその意味の区別が明白にされるためにも必要である。抽象的な判断行為を述べるという点では断定をいう動詞“是”も同じことである。“是”は断定の具体内容をいう補語なしには意味的に充足した文

を作ることができない。そして“是”が動詞句補語、さらには文補語を伴う表現は決して稀ではない。

是买新车 [新車を買うんだ]

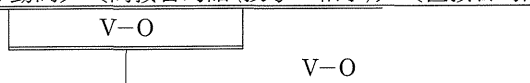
是上月买的新车 [先月新車を買ったんだ]

我是在家里给你打电话的。[私は家からあなたにお電話したのです。]

動詞の後置成分が一つの場合は、動詞－目的語構造か動詞－補語構造のいずれかになるだけだが、これが複数の後置成分を伴うものとなるとさらにいくつかの構文形ができてくる。²⁰⁾

まず複数の目的語をとるものとして授与動詞の二重目的語の場合がある。「二重」というのは次のような構造の重層を意味する。二つのものが対になっていることをいう“双(宾语)”ではない。

[授与動詞]－[間接目的語(授与の相手)]－[直接目的語(授与事物)]



送{你}{一支笔} [筆を一本さしあげる] …… 具体物を与える“给予类”

それぞれの例文の後の“…类”は马庆株(1983)の分類である。

买{小王}{一只鸡} [ワンさんから鶏を一羽買う] …… 具体物を奪う“取得类”

问{你}{一道题} [きみに問題を一つ(尋ねる →)出そう] …… 思考の中での与奪をいう“准予取类”

欠{我}{两块钱} [私から二元借りている] ……(同前)

马庆株は授与動詞以外で二重目的語を採るものとして場所と事物を重ねる型を挙げているがこれは対話の言葉でかなり限られた場合にしか現れない表現である。

[動詞]－[間接目的語(場所)]－[直接目的語(事物)]

放{那儿}{一个书包} [そこへカバンを一つ置く] ……“处所类”

送{托儿所}{一个孩子} [託児所に子供を一人送りとどける] ……(同前)

授与動詞の場合と同じく目的語の並ぶ(重なる)順序は固定している。直接目的語は動作の対象だけには限られず、現象描写の述語となる動作固体をいうものの場合もある。

来{这儿}{两个人} [ここへ二人の人がやってくる] ……(同前)

二重目的語としてさらに一つ形式目的語“它”を採る構文も挙げられているが、気楽な語気のぞんざいな表現であって常用されるものではない。

修{它}{两条路} 就好了 [道路の二本でも作りゃそれでいい] ……“包含虚指宾语的双宾构造”

逛{他}两天{北京城} [二三日ペキンの街をぶらつくでしょう] ……(同前)

後の例の“两天北京城”のように“动量成分”が前にあるものは目的語と併せてひとつの“宾语”とされているが、ここに書き分けたように三重とする見方もある。三方面の情報では一個の動詞句の陳述として詰め込み過ぎにならないか(乱雑な表現になる)と懸念されるが、“它”が実体的な情報をいうものではなく、動詞が「他動詞」機能を持つものであることを示すだけの接辞に近いものになっていることを考えれば、実質的には二方面の情

報と考えてよい。

次は目的語、補語の順に並ぶ構文形になるが、動作量をいう補語を除外すればすべて、

〔動詞〕－〔目的語〕－〔目的補語〕

のものと解釈される。

まず、使役動詞の場合がある。²¹⁾

请 {您} 登记 一下。 [お名前を書いてください。(受付などで)]

你要 {我} 去跳舞, 我偏偏不去。 [ダンスに行こうと(わたしに)いったって絶対に行きませんからね。]

命名動詞の場合はすでにふれた。

人家称 {他} 呆霸王 [人は彼を大間抜けと呼んでいる] ……“表称类”

同じ類のなかに“安排他班长” [彼に班長をふり当てる], “选他模范” [彼を模範に選ぶ(表彰)] なども挙げられている。

次に情意動詞の場合がある。目的補語は情意をもつ理由を述べると解釈される。

喜欢 {那个人} 大眼睛 [あの人のつぶらな目なのが好きだ] ……“原因类”

马庆株は挙げていないが、目的補語が動詞句のものもある。

妈妈嫌 {哥哥} 抽烟。 [母さんは兄さんがタバコを吸うので嫌いだ。]

所有や取得などをいう動詞で目的語の事物を限定する目的補語を伴う場合があり、特に動詞“有”にこの表現が多い。

有 {一个问题} 要问你 [きみに聞きたい(問題 →) ことが一つある]

找 {个地方} 坐 [座る場所を探す]

授与動詞の場合は二重目的語の後に目的補語が加えられて三重になることもないわけではない。

我想请父亲给 {我} {点实在的事情} 做。 [お父さんにすこしまともな仕事を(私にくれる →) させてくれるようにお願いしたいのです。] [曹禺:「雷雨」]

命名動詞以外にも、名詞句“双宾语”として、

急了 {我} 一身汗 [(私をあせらせて →) あせって冷や汗をかいた] ……“使动类”

这件衣服我可以当 {它} 五块钱 [この服は五元で質に入れられる(→ 質に入れたら五元になる)] …… (“交換类”)

などがあげられている。この“五块钱”は金額(価値)をいっており、ものとしての貨幣をいう授与動詞の目的語の“该我五毛钱” [私に五角(を)借りている] (“准予取类”)とは区別されている。

動詞の後に置かれて動作量をいうものは補語である。

看了一次 [一度見た]

想了一会儿 [しばらく考えた]

これに目的語が加われば複数の後置成分となる。

我岁数大 {他} 一倍 [私はとしが彼の倍になる] ……“度量类”

为难 {小王} 三回 [ワン君を三度困らせる] ……“动量类”

これも授与動詞の場合に三重の表現ができるであろう。

数量(動作量もその一つである)はすでに名詞句述語のところでも述べたように対象化さ

れにくいものである。²²⁾ 動作量は事物とはとらえにくいので、従来から“准宾语”と呼ばれて区別されてきた。動作量補語は他の目的語や補語とは著しく異なる方面の情報と意識されるからか、如上にのべた目的語を持つ構文にいわば遊軍的存在として随時加えられるようである。

9. 終わりに

中国語ではしばしば動詞形容詞句がそのまま名詞句の機能をもって使われる。それは個別の動詞単語に見られることとしてではなく、動詞という一つの品詞類の総体に及ぶ問題としてある。単語の語形変化が全くないという条件で、文から語句を(単語はもちろん句さえも)辞書项目的に切りとって論じているのでは、それがどうして名詞句の機能をもつか、動詞句として機能する場合とどこで違いが出てくるのか、問題に正対する解釈を見つけて出すことはできない。

中国語でも個々の語句は動詞句としての機能をもってか、あるいは名詞句としての機能をもってかが区別されて発話されているのであり、それは語形変化をもつ言語の話者が、異なった形の中から動詞形容詞か動名詞かを選びとって発話するのと同じはずのものである。ならば語形変化のない言語ではその違いをそれぞれのもつ発話の型の中に見つけだしていくほかはない。

当然ながらもその語句の置かれる位置が問われるのだが、それはただ主語—述語、動詞—“宾语”というような単線的な順序の問題ではない。語句はまず組まれる構造のどの位置にあるかを見なくてはならないが、さらにその構造は他を覆い、他に覆われるという重層の中にあるものとして考えられなくてはならない。そして重要なのはそれぞれの位置を占めることと連動してその語句に与えられる機能である。主語であるからこそ、目的語であるからこそ動詞句も名詞句の機能をもつのであり、述語であるからこそ、補語であるからこそ名詞句も動詞句と同じように働くのである。文という構造体は平面図としてではなく、それぞれの成分の陳述の性質の違いをも示す立体図で描かれなければならない。その陳述に二つのもの——提示陳述と説明陳述とがあるとするのが本稿の提案である。

〈注〉

- 1) 赵元任(1968)が定義するものである。その機能的性質までを考慮するので、あるいは赵元任がいうところと完全に一致するものにはならないかもしれないが、とにかく *expression* という用語を借りておく。吕叔湘簡約訳本(1979)、丁邦新訳本(1980)はともにこれを“词语”と訳している。
- 2) ここでいう補語は中国語の通行の文法書でいう“结果补语”などのそれではない。動詞単語(に接辞“得”がついたもの)とその後に置かれる“结果补语”が語句を作る場合(“擦得很干净”〔拭いてきれいである → きれいに拭いてある〕など)、その構造の中心語になるのは後の“补语”の方なのであって、機能からいえば補語と呼ばれるべきものではない。また両者が連用複合動詞を作る場合(“擦干净”〔拭いてきれいにする → きれいに拭く〕など)も含めていわれているが、それは統辞論とは分けて考えるべきものである。本稿で取り上げるのは構造の中心語である動詞に対する補語なのであって、英語の文法でいわれる *complement* と概略平行するものとしてよい。

- 3) 中国語の動詞の後置補語(広義)成分の考察は、はじめ馬建忠(『馬氏文通』1898)が動詞を補語(広義)をもつ“外動字”とそれのない“内動字”とに分け、さらに別に動詞“是”[…である]など若干の“決詞”を考えてその後におかれるものを“表詞”としたところから始まったが、以来基本的にこの三分法が後続の文法学者たちに受け継がれた。黎锦熙(『新著国語文法』1921)が“是”、“为”[…とする, …になる]、“叫”[(名前を)…という]などを“同動詞”とし、“内動詞”と“同動詞”の後にくるものを“补足語”と呼んで“外動詞”の“賓語”と分けたのが、やや本稿の説く二分の方向に向いたものだが(さらに“再帶补足語”として目的補語に当たるものも挙げており、英文法に倣ったように見える)、その後王力(『中国文法中的系詞』1937)は“是”を“系詞”として他の動詞と分けた。呂叔湘(『中国文法要略』1942)も“是”を“系詞”として主語と“謂語”をつないで“判断句”(“句”は *sentence* の訳語)を作るものとしたが、“变成”[…に変わる]、“为”など意味の近いものを“准系詞”としている。呂叔湘・朱德熙(『语法修辞讲话』1951)はこれらの動詞の後にくる成分を“表語”と呼んだが、これには述語が名詞、形容詞だけで作られるものも含まれる。そして『暫拟汉语教学语法系统』(1956年制定)に至って“是”は“判断句”で後置成分とともに“合成謂語”を作るとされて一つ特殊な地位に置かれ、動詞一般についてはもっぱら“賓語”が説かれるようになる。ただし動作量をいうものは一般の“賓語”と区別されて、丁声树等(『现代汉语语法讲话』1961)が“准賓語”として以来広くこの用語が使われている。张志公等(『汉语知识』1979)のようにこれを“補語”と呼ぶものもあるが、“賓語”の部類からはずして“結果補語”などの部類に移したに過ぎない。以後今日まで動詞の後置成分は“賓語”と(“結果補語”などの)“補語”の二分で考えられてきた。
- 4) 主語、主題という用語について解説しておく必要がある。一般には従来から主語とされてきたもの、動作主体などとされる類はそのまま「主語」と呼び、その枠にははらないものを「主題」とするというような扱いがされている。たとえば湯廷池(1978)は“去年我只病了一次。”[去年私は一度だけ病気になった。]という文を挙げて、述語動詞の“病”[病気になる, 病む]は“有生名詞”の“我”[わたし]と意味上「一定の選択関係」にあるが、主題の“去年”[去年]との間にはそれがないということで主題と主語はちがうのであり、主題を動作主体などと並存するものとする。この場合の「主題」は、たとえば「この映画の主題」などというときの一般名詞の意味でいわれているように思われるが、これは動作の仕手と受け手などのように互いに対立して主語のいう事物を分類していく類のものとして並べていわれるべき概念ではないであろう。「動作主体」などは文が述べる事物のもつ役割であるが、「主題」は文表現の上でその語句の性質をいうものであり、視点を文表現の面に移せば「動作主体」も含めてすべての主語を主題ということが出来る。そもそも主語が指す事物——言葉の外にある事物をとりあげて、動作の仕手であるか受け手であるか、さらにはまた手段・場所・時間などいくら分類しても、そういうものもあるというだけのことで、主語とは何かをいい当てることはできない。そしていい尽くすことのできない部分を、見方によってはすべてを覆うことのできる「主題」という用語で埋めるのは、極めて便宜的な措置といわざるをえない。

文法用語としての主題は文という構造体のなかにあつてまず主語が提示するものという、主語のもつ機能からいうものとしたい。主題は主語(と同じもの、あるいはその一部)ではなく、主語の提示するものの文表現の上での性質をいうのである。もし主題に挙げられる(すなわち主語となる)事物の範囲はと問われるなら、それは思考の中で対象化されうる限りのすべてのものと答えることになる。主語は常に提示陳述のものである。そして次に述語が主語が提示した主題に説明を加えるのであり、この説明はこれもまたたとえば「使用方法の説明」などというときの一般名詞の意味ではなく、文という構造体のなかにあつて述語のもつ機能をいうものとして理解されなければならない。なお、主語、述語などというときはそれぞれ主語語句、述語語句全体を指していう。語句を作っている構造のなかの中心語一語だけをとりだしていうのは、文を(構造の重層した)構造体として把握していないことである。上掲の例でも主語“去年”(時間)は(動詞一語“病”とではなく)述語“我只病了一次”(事件)と充分な「選択関係」にあるのである。

- 5) 動作が向かう目標をいうものと誤解されがちだが、他に適当な用語もないのでしばらくはやはり「目的語」と呼んでおく。広くその動作に係わってくる思考の中の客体存在 (*object*) を指しているものとする。
- 6) 本稿でいう目的語は通行の文法書でいう“宾语”とは概念規定が異なる。代表的な文法書として朱德熙(1982)の説く“宾语”の範囲は、それを動作の受け手、仕手、手段、動作の結果生ずる事物、運動の到達点、動作の継続時間などと“宾语”が指す事物で分類するものであるが、本稿では対象化という観点から、どんな事物が対象化されうるかを考えることになる。
- 7) 中国語にも日本語の形式名詞「(…)すること」とおなじように名詞を置いたり、準体助詞「(…する)の」に当たる“的”を附加したりする構文がないわけではないが、そういう表現は(特に対話のことばでは)あまり用いられない。
- 8) 通例は動作動詞の場合のそのように“想一想”[ちょっと考えてみる]とか“说了一个故事”[(ひとつ)のお話を(話した →)聞かせてくれた.]などと動作の様態を述べる形をとらない。
- 9) 英語の文法でいわれる *objective complement* と概略平行するものとしてよい。
- 10) 通行の文法書では、二つの名詞句が並んでいるとしてこれを“双宾语”の部類に入れている。後置される語句の数だけで、授与動詞の二重目的語構文や単目的語に動作量補語をあわせ持った構文などとひとまとめにするのでは、それぞれの構文の違いは見分けられない。朱德熙(1982)は“叫…”, “骂…”のほかに“当他人”[彼を善人だと思ふ]という例も挙げて“近宾语”と“远宾语”の指すものがある面で同一性を持っているもの」としている。事物の論理はそのまま言葉の構造の解説にはならない。
- 11) この主語や“宾语”の位置に置かれた動詞形容詞単語を動詞とするか名詞とするかで“名物化用法”が説かれたり、“动名词”が提案されたりして、永年にわたって議論が続いてきた。胡明扬(1996)がこれまでの議論の経過と問題点を記述している。動詞が名詞になるか、あるいは名詞を兼ねるかという問題のたて方からしてすでに単語を具体的な文からきりはなして考えることになるが、品詞の注記などこれらの動詞形容詞単語を辞書上でどう処理するかを考えるのは本題ではないのでふれないことにして、諸家の論じてきた例文が列挙されている中からいくつかを借りておく。
- 12) この二例を対照すると“聪明”, “见过”にも下線を引いてよいことになる。ただし動詞“等于”の後は補語であろう。
- 13) 赵元任(1968)が動作に動作を加えるものとするものの一つで、朱德熙(1982)は名詞句にはなっていないと解釈している(注18参照)。やはり補語と解釈される。
- 14) この“陈述”は本稿で定義した「陈述」とはもちろん違う。杉村・木村訳本(1995)は「叙述性」と訳している。以下に引用する朱德熙の挙例の訳も同書のものである。
- 15) この例は「すっきり清潔なのが快適だ」と提示陳述として見ることもできるかもしれない。重ね型形容詞がいう個別の事象の状態描写は、本来は対象化されにくいものであるが、臨時に対象化してとらえられているのかもしれない。
- 16) 類似の例は赵元任(1968)がやはり主語として挙げるものにも見られる(下線は筆者)。
他死了的话, 就不容易解决了。[彼が死んだらことは解決しにくくなる.]
狗拿耗子, 多管闲事。[犬がネズミを捕まえる。余計なお節介.]
你光说那个没用。[そればかりいってもどうにもならないよ.]
他死了我真难过。[彼が死んで私はほんとうにつらい.]
- いずれもふたつの述語あるいは文の接続である。第二例は主語—述語のがっちりした一個の説明文としていわれるのだとしたらそのおもしろさの大半が失われるだろう。一呼吸の(ほとんど心理的な)間をおいて、二つの文が投げ出されてこそ歇後語は粋なのである。
- また胡明扬前掲論文は主語が動詞(句)からなるものの例を挙げるなかで次の五例について、やはり主語と認めることに疑問を呈している。

打了人是错误的 [人をたたいたのは(倫理的に)まちがっている]

大了不好看 [大きいとみっともない]

大了没关系 [大きくてもかまわない]

研究研究就能解决问题 [検討してみれば問題は解決できる]

平平安安就让人放心了 [無事であれば安心させてくれる]

たとえば最初の例は“(他)打了人,(这种行为)是错误的”[(彼は)人をたたいたが,(こういう行為は)まちがっている]の“紧缩”された二つの“分句”(clause)と理解できそうであるとす。しかし“这种行为”といい換えるのではかえって対象化されているようにも見えてくる。そうなると二つの述語の接続とは考えにくくなる。

- 17) 注16の“打了人是错误的”はこの例と区別できるのであろうか。
- 18) “开始了新的生活”[新しい生活をはじめた]などのように動作とその対象をいっているのではなく、「…し始める」と動作過程をいう動作にその実体動作の内容を補い述べるのである。注13参照。
- 19) 吕叔湘主编：『现代汉语八百词』(北京・商务印书馆，1980)など。
- 20) この複数補語(広義)の構文については马庆株(1983)が“双宾语”の種々の型を網羅的に拾って分類している。解釈の違いが対比しやすいので以下の挙例は多くをこの論文から借りておく。
- 21) 马庆株は“兼语式”は“双宾语”に入れていない。したがって次の二例は马庆株のあげるものではない。ただし、本稿の観点からすれば“兼语式”などというものを認めることはできない。文を一つの構造体と見るならば、その発話の途中で主語-述語の座標軸がふれ動くなどということとは考えられないことである。これもまた個々の単語を文の構造から切り離してとらえているのであり、たまたま動作主体とその動作をいう語が並んで、「格」による語形変化のないままに主語-述語の並びに見たというにすぎない。
- 22) 马庆株は“度量类”の“大{他}一倍()”[彼より倍年上だ。]には()の位置にその数量で限定される事物をいう語を加えることができないといている。

参考文献

- 赵元任：『A Grammar of Spoken Chinese (中国话的文法)』University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1968
- 吕叔湘简约译：『汉语口语语法』北京・商务印书馆，1979
- 丁邦新译：『中国话的文法』香港・中文大学出版社，1980
- 汤廷池：「主語と主題の画分」『语文周刊』1523期(1978)所載；『国語语法研究論集』(台北・台湾学生書局，1979)所収
- 朱德熙：『语法讲义』北京・商务印书馆，1982
- 杉村博文・木村英樹訳：『文法講義——朱德熙教授の中国語文法要説』東京・白帝社，1995
- 胡明扬：「兼类問題」胡明扬主编：『词类問題考察』(北京語言學院出版社，1996)所収
- 吕叔湘主编：『现代汉语八百词』(北京・商务印书馆，1980)
- 马庆株：「现代汉语的双宾语构造」『语言学论丛』第10辑(1983)所載；『汉语动词和动词性结构』(北京・北京語言學院出版社，1992)所収

(平成11年11月15日受理)